

総括：山口県中世城館遺跡総合調査を終えて

服部, 英雄
くまもと文学・歴史館：館長

<https://hdl.handle.net/2324/1936959>

出版情報：2018-03. 山口県教育委員会
バージョン：
権利関係：

5. 総括

(1) 山口県中世城館遺跡総合調査を終えて

前年の長門地区報告に引き続き、周防地区の中世城館調査の報告を行う。

これまで周知されていた周防の城館遺跡は217ヶ所、今回縄張り図を作成できた遺跡は48ヶ所である。今回の報告により、まずは県内の中世城館遺跡の所在、形状、立地ほか、基本的な知識の共有ができたことになる。今後保護への取り組みも進むだろうし、地域の歴史教育の素材にもなるものと想定している。ただし城館遺跡は数が多い。山は年々入りづらくなっている。課題はなお残されているのかもしれない。

城の基本要素は①高さ、②雨風をしのぐ建物、③水であろう。①は弓矢や投石といった武器の使用において、高さが圧倒的に有利であったことを示す。上から下へ向けての弓矢の射撃、投石は圧倒的に威力がある。反対に下から上に向けてのこれらの使用は、引力に逆らうものだから、武器として機能しない。鉄砲もしかりである。上にいるもののみが武器を使用できて、下にいるものはこれらの武器が使えなかった。

山城すなわち高い位置に城が築かれる。①高さを得られる根本的要件である。城郭の範囲はこれらの武器の有効射程距離、投石可能距離である。この範囲内に入ったら城側の有効射程距離内にいることを意味し、標的とされるが、自身の有効射程距離を確保することができなかった。

山城以外でも、平地に築かれる城の場合は土塁を構築し、その上に建物を建てることによって、高さを確保した。

山城の遺構の中に機能がわかりづらいものがある。階段状遺構とか段郭とか呼ばれるもので、わずかな人員しか置けないような小さな平坦地が尾根上に連続する。どこで守備をしたのか、理解しづらいが、おそらくこうした上からの射撃なり投石を効果的にするのであろう。

三要素のうち②建物は、ふつうは発掘調査をしなければ痕跡がわからない。建物は大半が掘立柱建物であったから、斜面であっても柱を4本以上建てられれば建つ。建物は武器を収納し、兵士の寝る場所となる。籠城には食料が必要だから、建物に保管した。兵糧攻めにあえば、いずれ食糧は尽きる。長期の籠城に備えた補給が必要である。

平場（くるわ、平坦地形）はあったほうが、使い勝手が良く、城内を走り回ることができる。建物も使いやすいものが建つ。だが自然の山はほとんど斜面である。切盛りによる造成にはかなりの時間と労力・費用がかかった。今、下から山を見て、城山であると簡単に推定できるのは、この自然地形には無い、造成された平坦面があって、水平地形が見えるからであろう。山城には地形に人工的に手を加えたものが多いけれど、手を加えなくとも高さそのもので有利になった。

要素③水場がわかる城は少ない。要素③はイコール低さであるから、要素①の高さとは相反する。山が高ければ水は得にくい。しかし水（飲料水）がなければ滞在＝籠城がむずかしい。水場は必ずあった。流れがあれば、確認できる。かなり離れた位置、城域外にまで汲みに行くこともあった。そこまでは安全を確保しておく必要があった。

水の手や井戸が図面に明示された城は少なかった。『防長風土注進案』ほか地誌類によって、井戸の存在が指摘され、あるいは遺構も確認されている城館には、平地では大内弘直館（説明による、図にはなし）や江良氏館跡、中津居館、平子氏館、山頂部では藤谷城跡、熊毛山城跡、日の熊山城跡、七尾山城跡、遠尾山城跡、岩国城、高嶺城などがある。岩国城水の手大釣井のように、どのようにして高い山上から地下深い水脈を見つけることができるのか、ふしぎに思うし、その技術に驚く。長期

の拠点的な城以外では、井戸は掘らずに山麓から毎日運搬したのであろう。

さて山城にいる城兵は何人ほどなのか。城によってさまざまであろう。数十名の守備兵しかいないような城もあれば、千人近い兵が駐屯する城もあっただろう。いるのは男だけだったのだろうか。後者の大規模城郭なら、賄いなどで女性が居住していたことも考えられる。城には人だけがいたのだろうか。武士は馬を操ることが必須である。山城に馬はいたのか。

山上でじっと耐えて守るのみなのか、包囲軍を逆襲して追い払う努力もしたのか。下までおりて攻城軍を排除するつもりだったならば、つまり籠城戦から野戦への展開を想定しているのならば、城内に何十頭もの馬を飼育していたと思われる。大きな城であろう。

馬賣場という地名は馬場の存在を示す（大将陣城、筑前では立花山城・筑前筑後国境の古処山城に、それぞれ馬賣場がある）。馬洗い伝説（白米伝説）が各地にあるけれど、馬を置いていたことの反映か。狭い馬小屋（厩）にいる馬は、自らの排尿が蹄にかかることがあって、そのままにしておくで発生したアンモニアで蹄を損傷する（蹄叉腐爛）。それを防ぐため、常に蹄洗、すなわち蹄を洗う必要があった（自由に動ける自然界では尿が蹄にかかることはない）。また馬は暑さに弱く、発汗した後、水をかけた。そうした水を確保するための池は、近世城郭にはしばしば備えられている（例えば姫路城三國堀、松山城二ノ丸大井戸など）。馬がいれば馬洗い（蹄洗）ほかに多量の水が必要であった。溜池ほど大規模ではなくとも、水堀まで降りることができれば、雑用水確保に苦勞する事もなかったけれど、高さを求める山城と低い場所にしか蓄えられない水の確保は、互いに相容れない要件だった。

飲料水は不可欠である。軍馬飼育にも必要である。水の手遣構は必ずあった。水がなければ城＝生活域として機能しえない。しかし城郭内とは限らないこともある。そうしたときは城兵が水汲みに通う必要があった。

南北朝時代、九州から東上する足利尊氏に対し、後醍醐天皇方の周防在庁らが建武三年七月ころに敷山城（防府市牟礼）に籠城し、七月四日に尊氏方の攻撃を受けた。敷山城は現観寺跡に同じとされ、国指定史跡となっている。周防国吏務代々過現名帳によれば、籠城したのは国司円観上人の目代であった葉仙房、小目代清尊らで、同年七月日の武久文書によれば立て籠もった人数は数千騎で、攻め手側の一人、永富季道（長門守護代家）代官子季有らは大手から本堂（敷山本堂）に攻め入ったと記されている。山寺であれば、高さも備わり、生活ができる建物も水もあった。数千騎（馬一頭＝騎馬武者一人に二人の従者が付く。人数は三倍となり、騎馬武者二千騎なら六千人）がはたして全員この山上にこもることができたのかどうかはよく分からないが、城の要件は備えていた。なお現観寺跡は矢筈ヶ岳山頂（461m）ではなく、八合目ほどの標高350mにあるから、背後の備えなどに疑問が残る。山頂を含めて広域を城域としたものかと推測するが、数千騎もいながら、わずか1日の攻撃で落城した原因はこうした立地にも関係しよう。

さらに古くなるが、光市に古代の朝鮮式山城である石城山神籠石がある。白村江にて唐・新羅に敗戦した時期に日本側の防衛拠点として築城された。朝鮮式山城は以後も朝鮮半島では継続して築城されたけれど、日本での築城は古代の一時期のみで終わる。石城山には城の要件の内、①高さは当然にあるが、水門もあって、沢水も城郭内に確保できた。③水場である。なお日本的な山城と異なって、城域外と内を明確に区分する城壁（石塁）があった。

神籠石つまり石城山古代山城も、標高362メートルの石城山々頂を中心に八合目付近を城壁が廻

る。有効射程距離を城壁で確保する点が日本の山城と異なっていた。幕末に第二奇兵隊の本営が石城山神護寺に置かれたのは、敷山城にも類似する。時代を問わない軍事要地で、高さ・建物・水を備えていた。

朝鮮式山城のような城外と城内を明確に区分する石塁や土塁は、平地の城（＝館）、あるいは織豊期以降の近世城郭ならば顕著であろうが、中世山城ではわかりにくい。おそらく柵を設けるか、臨時に逆茂木を置く程度で、大がかりな区画施設・構築物は存在しなかったから、痕跡が残りにくかった。

周防の城地名では日ノ熊山・旗岡山が注目された。狼煙（火の隈）であったし、旗による信号・通信があった。馬賣場（大将陣）は上記のような山上に馬の調練場があったことを示す。

今回、防長二国の城館遺跡に関する基本台帳・基本史料が整備された。この二冊の報告書は、山口県内の城のあり方を多様に考えさせてくれる知の宝庫になりうるだろう。